

芦屋大学論叢 第78号
(令和5年3月8日)抜刷

《研究ノート》

子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力について

—幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通して—

石 田 愛 子
稲 葉 修 子
葉 谷 佳 苗

《研究ノート》

子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力について — 幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通して —

石 田 愛 子

稲 葉 修 子

薬 谷 佳 苗

芦屋大学臨床教育学部

1. はじめに

保育士養成課程、幼稚園教諭養成課程におけるピアノや歌唱の実技指導は、“将来、保育者として適切な音楽的環境を構成し、幼児の「表現」活動を豊かにできること”を最終目標としている。本学児童教育学科幼児教育コースにおいても、3年次の保育実習、幼稚園教育実習までに実践的な音楽力をできるだけ身につけられるよう1年次に「声楽」、1・2年次に「器楽」、3年前期に「保育内容（表現 - 音楽リズム）」の音楽系科目を配置している¹⁾が、大学入学までにピアノ学習経験が全くない学生も少なくなく、保育の現場で通用する音楽力を短期間で習得するのは容易ではない。特にピアノ弾き歌いは保育における重要なスキルのひとつであるが、ピアノを弾くことと歌うことを同時に行うため、ピアノ学習経験の浅い学生にはかなり難易度が高い。しかも保育の現場では、子どもたちに目配りし、支援をしながら片手間に弾き歌いしなければならず、多くの学生が苦手意識を持つのも当然といえる。

幼児教育の現場で求められるピアノの役割や、保育者に求められるピアノ技能とその指導法については、各養成校において多数の研究が行われている。鎌田(2018)²⁾は「養成校でのピアノ指導と現場で求めるピアノとのずれが感じられる」という現場の声を、和田垣・生地・藤谷・澤田(2018)³⁾は弾き歌いにおける歌とピアノの重要度（歌唱力か伴奏力か）について、多くの幼稚園園長が歌唱力をより重要ととらえていることを、それぞれ紹介している。保育者や教員を対象として数多く出版されているピアノ弾き歌い曲集は、“弾きやすく、練習しやすく、効果的”なピアノを求めて様々な工夫が凝らされているが、好みや習熟度によっても使いやすい楽譜は異なるため、大学の授業用テキストとして最適な一冊を選ぶのもなかなか難しい。

本稿では、2022年度に実施した幼稚園教育実習後のアンケート調査を通して、本学学生のピアノと歌唱の実態と課題を明らかにするとともに、幼稚園で求められる「表現」活動を支える音楽スキルを身につけるためのカリキュラムと指導のあり方について考察する。

2. 幼稚園教育実習参加学生の実態と課題

教育実習は、大学の講義や演習での学びを現場で実践する重要な機会である。子どもと直接かかわることで、やりがいや喜び、難しさを知り、自身の適性や課題と向き合うことは、将来の進路決定にも大きく影響するため、教職を志す学生にとって教育実習の成否は重大である。

実習に向けて自己課題を明確にし、意欲と実力を高めるため、本学独自の取り組みとして2年次に「実

習参加資格テスト」を実施している。テストの課題には「保育の場面を想定したピアノ弾き歌い」や「手あそび」も含まれる。教育実習に参加する学生はこのテストをクリアし、前述の音楽系科目をすべて修得することで、ある程度、保育の現場で実践できる弾き歌いや手あそび等のレパートリーを身につけている（はずである）が、実際に一人で「先生」として幼稚園の子どもたちの前に立つのは、教育実習が初めての機会となる。

教育実習に先立ち、実習園で行われるオリエンテーションでは、実習期間中に歌う曲についての指示があり、ピアノ弾き歌い用の楽譜を手渡されることが多い。学生への聞き取り調査によると、「曲を指定され、楽譜を手渡された」のが6割以上、「曲を指定され、自分で楽譜を用意するように言われた」のが2割弱であった。ピアノについて不安があり、自力で実習に備えるのが難しいと感じている学生のフォローアップを目的として、希望者を対象に「実習直前ピアノ補講」を2022年8月に実施した。受講者のレベルはまちまちであったが、次のような共通点がみられた。

- ・楽譜は読めるはずなのに、「知らないから弾けない」と言う。

実習先で手渡された楽譜に知らない曲があって弾けない、という学生が多い。「一度弾いてもらえたらわかる」とも言う（だから補講に来ました、ということか）。楽譜の読み方は知っているはずなのに、頭の中で音楽が鳴らない、つまり楽譜をみても「歌えていない」ということである。

- ・楽譜どおりに弾くことにとらわれる。

実習先で手渡された楽譜が自分にとって難しいバージョンであっても、そのとおりに弾かなければならないと思いつむ。配付した楽譜と異なることを実習先で指摘されるのが不安なのか、何が弾きやすく何が難しいのか自分でわからなくて選べないのか。生真面目さともとれるが、子どもたちが楽しく気持ちよく歌えるようにすること、という本来の目的を見失わないようにしなければならない。大学で使っている教科書にもっと弾きやすいバージョンがあればそちらを使っても差し支えない、スムーズに弾けることのほうが大切である、ということを十分に理解させる必要がある。実際に弾き比べて聞かせ、「この音は省いても大丈夫」と具体的に示すと、「それなら弾けそう」と安心する学生もいるが、簡略化しても音楽的に差し支えない理由を理論的に理解していないと、レッスン後、一人では再現できなくなる。

- ・歌うことがおろそかになっている。

ピアノが苦手な学生ほど、「音の高さと長さをただ読んで、鍵盤に移し替える」作業になっている。左手だけの練習をするとき、右手のメロディーを思い浮かべることなく、ただ「指定の音を指定の回数鳴らす」状態に陥っている（拍感もなく、一定のテンポをキープすることさえしないケースもある）。これでは、歌いながら両手で弾くところまで積み上げができないのはあきらかである。ある程度ピアノは余裕をもって弾けるレベルであっても、曲にあった歌い方や表現の工夫ができる学生は稀である。

これらの傾向は、ピアノレッスンのあり方について再考すべき課題を含んでいる。演奏技術の習得が中心となるピアノレッスンでは、「歌うこと」よりも「ピアノを弾くこと」に重点が置かれるのは当然であり、楽譜どおりに正しく弾くことが重視される。弾き歌いにおいても、作曲者のオリジナル伴奏で弾くのが最善であり、簡易伴奏はあくまでも便宜上やむを得ない方法と見なす傾向が多分にある。そのような指導を受けている中で、学生が（難しいからという自己都合で）音符の省略について消極的になるのはむしろ当然といえよう。また、弾き歌いは、片手練習の段階から歌いながら弾く練習をするよう指導しているが、両手奏が難しい場合は「先ず弾けるようにする」練習が優先され、「歌いながら」は後回しにされがちである。時間的な余裕がなければ難しいが、読譜の段階でソルフェージュを十分に行い、「先ず歌えるようにしてからピアノで表現する」という手順で指導することが望ましいと考えられる。

3. アンケート結果

幼稚園教育実習で学生は、どの程度ピアノを弾いたり歌ったりする機会があり、どのような学びを得てきたのかを把握するため、2022年9月に幼稚園教育実習に参加した学生を対象に「幼稚園教育実習後のピアノに関するアンケート」を実施した（回答率100%）。実習参加学生は3年生9名、4年生5名の計14名で、実習先は13園、主にかかわった子どもの年齢は5歳児が最多で5名（35.7%）、4歳児が4名（28.6%）、3歳児が3名（21.4%）、異年齢・縦割りが2名（14.2%）であった。

主な質問内容は次のとおりである。

- ① 実習中、子どもたちの前でピアノを弾いた場面
- ② 子どもたちの前で弾いたり歌ったりした曲名（ピアノ曲や、歌唱のみの手あそび歌含む）
- ③ 保育の中でピアノを弾く際、特に難しいと感じたこと
- ④ ピアノや歌について、実習先の先生から受けたアドバイス
- ⑤ 実習を終えて、どのように感じているか
- ⑥ これから幼稚園教育実習に参加する人へのアドバイス

①実習中、子どもたちの前でピアノを弾く場面としては、「お帰りのとき」が最多（64.3%）で、「お弁当や給食の前」「季節の歌などの歌唱指導」が同率2位（50%）、「朝のあいさつのとき」（35.7%）「お片付け・手洗い・うがいのとき」（14.3%）が続く（図1参照）。幼稚園では、一日の生活リズムの節目となる挨拶の場面で、歌うことを大切にしていることがわかる。

実習中、子どもたちの前でピアノを弾く場面はあ...か？ あてはまるものをすべて選んでください。
14件の回答

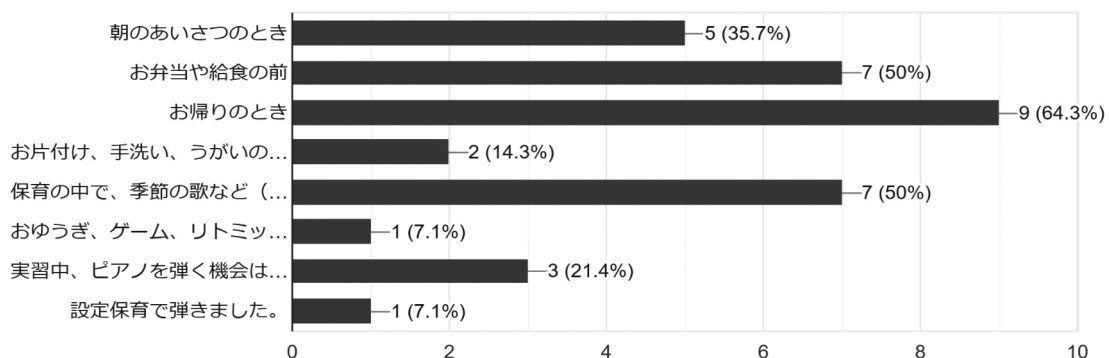


図1 実習中、子どもたちの前でピアノを弾いた場面

②ピアノ曲や歌唱のみの手あそび歌を含め、「子どもたちの前で弾いたり歌ったりした曲」について思い出せる限り挙げてもらったところ、大半の学生が3~4曲挙げており、一番多い学生で10曲、一番少ない学生で1曲であった。「実習中、ピアノを弾く機会はなかった」と回答した学生も、何らかの形で、子どもたちの前で歌は歌っている。「子どもたちの前で弾いたり歌ったりした曲」を分類すると、表1のようになる。

表1 子どもたちの前で弾いたり歌ったりした曲

朝のあいさつ	あさですおはようございます 朝のうた おはようのうた おはよう
お弁当・給食	おべんとう(3)
帰りのあいさつ	おかえりのうた(5) さよならのうた さようなら
生活の歌	おかたづけ おててをきれいに 眠れ眠れ
季節の歌など	とんぼのめがね(6) 大きな栗の木の下で(2) きらきらぼし(2) むしのこえ きのこ しょうじょうじのためきばやし 夕やけ小やけ つき あなたのお名前は 元気いっぱい どこでしょう たのしいね 人間っていいな 君が好きだって ホ・ホ・ホ しあわせなら手をたたこう 手をたたきましよう 九月の讚美歌
手あそび	はじまるよはじまるよ(2) ペンギンマークの百貨店 とびらをあけるよ こっちからきつねがやってきて 雷ドンがやってきた 三ツ矢サイダー
ピアノ曲	お人形の夢と目覚め
マーチ	子犬のマーチ
その他, 不明	静かになる曲 おはなし

※カッコつき数字は回答者数, 数字なしは1名のみ回答

③保育の中でピアノを弾く際、特に難しいと感じたこととしては、「子どもたちに目配りしながら弾くこと」を挙げた学生が10名(71.4%)で最多、「スムーズに完奏すること」が8名(57.1%),「子どもたちのペースに合ったテンポで弾くこと」が7名(50%),「言葉かけしたのち、タイミングよく弾き始めること」が5名(35.7%)であった(図2参照)。保育の流れの中で子どもたちの様子を観察し、適切な支援を行いながら弾き歌いするのが難しいのは実習生にとって当然といえるが、「スムーズに完奏すること」を未だに難しいと感じる学生が多いのは気がかりである。

保育の中でピアノを弾く際、あなたが特に難しい...か? あてはまるものをすべて選んでください。

14件の回答

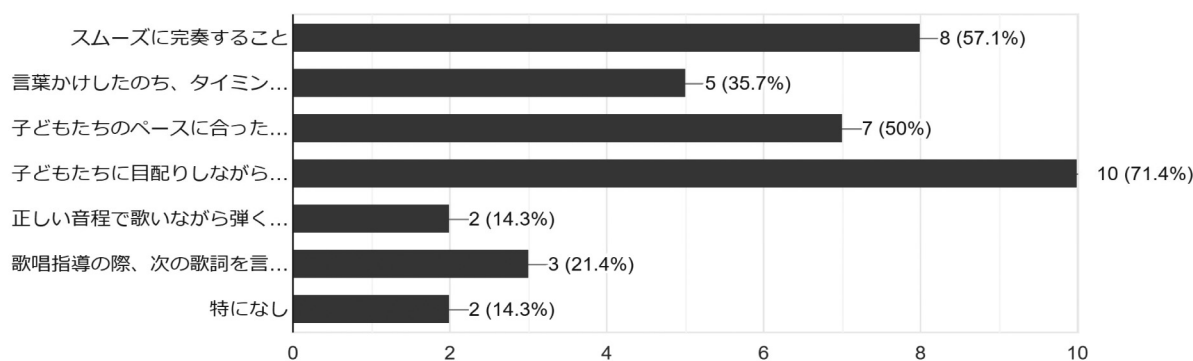


図2 保育の中でピアノを弾く際、特に難しいと感じたこと

④ピアノや歌について実習先で受けたアドバイスは、練習不足についての指摘、スムーズに弾けないときの対処法、実践的なテクニック、心構え、に大別される。

・練習不足についての指摘（回答数3）

「練習をもっとして、スムーズに弾けるようにしてきて」「練習のときから録画するなど緊張感のある状態で練習すること」「練習し、実践する」など

・スムーズに弾けないときの対処法（回答数3）

「両手が難しければ、片手で止まることが少なくなるようにすること」「ピアノが両手で弾けなくなったときは無理して両手にしないで、弾ける所まで弾いて、弾けない所からは子どもたちと一緒に歌うというのに変えてもよかったんじゃない？とアドバイスを受けました」「なかなか上手く弾けなくてごめんねって言いすぎるのは子どもたちに不安を持たせてしまったりするから、それはやめて、言うなら活動後に、子どもたちにそっと、ごめんねって言ったほうがいいよ、というように言われました」

・実践的なテクニック（回答数2）

「子どもが歌えるように、ゆっくり弾くように」「間をあけずに次々と曲を弾くほうが、子どもたちの集中力が切れずにみんなで歌える」

・心構え（回答数2）

「落ち着いて弾くこと」「子どもたちの意見を聞くのと流されるのは違うから、自分がどういう意志を持ってその時間何をするのかを考えるように、とアドバイスを頂きました」

・その他

「特になし」（3名）、「覚えていない」（1名）

⑤実習を終えて、どのように感じているか、という問いについて、「幼稚園の保育において、ピアノや歌のスキルは重要であると感じる」が8名(57.1%)、「もっとピアノや歌を練習する必要がある、または練習したいと感じる」が7名(50%)、「実習前よりも、幼稚園の先生になりたいという気持ちが強まった」が6名(42.9%)であった。保育の中でピアノを弾くことについては、依然として「自信がない・不安である」学生が5名(35.7%)いる一方で、「実習前よりも自信が持てるようになった」学生も2名(14.3%)と少数ながら存在する。子どもたちの前で弾いたり歌ったりした曲数が多い学生ほど、自信につながったことがうかがえる。

⑥「これから幼稚園教育実習に参加する人へのアドバイス」については、自身の経験を踏まえ、今後の指導を考えるうえで示唆に富む回答が寄せられた。いくつかに分けて紹介する。

・事前準備・練習について

「先生方が1日の流れで弾いている全ての曲の譜面をもらっておくと全日実習や半日実習に役立つ」

「オリエンテーション時に園で歌っている歌の楽譜を貰い事前に練習する」

「朝の会や終わりの会で使われそうな曲を練習しておいたらいいと思います」

「朝のあいさつ、おかえりの歌は必ず弾くと思う。実習が始まると記録に追われ弾く時間が少なくなるため、実習が始まるまでに弾けるようにしておくべき」

「給食のときや帰るときの歌は言われなくても弾けるようにしておいた方がベストだと思う。就職してからも使えるから。あとは1曲でもいいから自信を持って弾ける曲を用意しておく」

「手あそびはピアノを弾くよりも簡単にできるので、バリエーションを沢山持っていた方がいいと思います。」

ひとつの手あそびでもゆっくりしたり速くしたり、楽しみ方はたくさんありました」

「リズム遊びで使えるピアノはできた方が良かったと思いました」

「私の幼稚園はピアノを重要としていたので、マーチなど弾けるように持ち歌を作っておくととてもいいと思いました。ゆっくりと弾くことを意識しました」

・スムーズに弾けないときの対処法

「子どもたちの前で弾く際に音が分からなくなって変な音になってぐちゃぐちゃになった時は、子どもたちはずっと歌ってくれているので、弾くのを辞めて子どもたちと一緒に歌うようにしたらなんとかなる」

・心構え

「ピアノを上手く弾く・弾かないよりも、子どもたちが楽しんでその歌に馴染んでいるか、その歌の世界を楽しめているかが重要だと思います！ 実習先の保育者の方にも同じようなことを伝えられました」

「指導案を早めに仕上げる、質問をたくさんする」

「常に子どもたちがいるという気持ちで練習に取り組む。弾くだけでは意味がないということに気づいた。実際に子どもたちを前にするとテストや試験の何倍も緊張する」

「1年の時のピアノ練習、試験が役に立ちました。練習とは違い、子どもたちを前にピアノを弾くのは楽しかったです。とても大きな声でみんな歌ってくれます。間違えたとしても笑顔で、流れるようにそのまま、子どもたちと楽しんで歌い、ピアノを弾いて、手を止めない事が大事だと思います」

本アンケートとは別に、「幼稚園教育実習事後指導」の授業で学生がポスター発表（学内掲示）したものの中にも、ピアノに関する次のような記述がみられた。

「今後の課題：ピアノは、子どもたちを前にして楽しく一緒に歌えるように、現場での経験が必要です！」

「自己課題や身につけたい力：子どもたちとコミュニケーションを取りながらピアノが弾けるようにすること」

幼稚園によって音楽表現活動の内容や比重は様々であり、学生の実習体験も多様化している。教育実習先には学科教員が分担して訪問指導を行うが、研究保育を参観できるとは限らず、実習生が子どもとかかわっている場面を見る機会がないこともある。実習先での弾き歌いの場면을観察できる機会もめったにないので、客観的な評価は難しいのが現状であるが、今回のアンケートにおいても学生はそれぞれ貴重な学びを得てきていることが見てとれる。これまでも「幼稚園観察実習」⁴⁾などで保育者の弾き歌いを見聞きし、保育におけるピアノや歌の重要性を頭では理解していても、実際に3週間“子どもたちの先生”の立場で保育の現場に身を置いてみて、改めてその大切さを実感した学生が多かったものと思われる。

学生自身の気づきにもあるように、子どもたちとともに音楽や歌の世界を楽しめることが大切で、そのためには練習と、現場での経験が必要である。保育者を目指すうえで、さらに保育者となったのちも、継続して音楽スキルの向上に努める姿勢と、自学を可能とする基礎力と学び方を習得しておくことが肝要である。

4. 今後の指導のあり方について

以上を踏まえ、子どもたちの「表現」活動を支える保育者の音楽には、基礎技術のピアノ演奏だけでなく、「歌うこと」、それも子どもと共にという視点を持ち、子どもが表現したいという気持ちを援助、指導していきけるような能力が求められていると考える。子どもたちの感情を豊かにする「歌」と「歌の伴奏」、そして、子どもたちの活動を導き出す「リズム活動のピアノ」を実践的に習得していくことが望まれる。

今後の授業改革として、歌唱及び伴奏について、またリズム活動のピアノについての具体的な指導法を以下に挙げてみる。

4-1. 歌唱及び伴奏について

4.1.1 歌唱の重要性

はじめに述べたように、本学では、大学入学までピアノの学習経験が全くない学生が少なくないため、ピアノ弾き歌いにおいては、どうしてもピアノに焦点が当たりがちである。そのため、「ピアノの演奏技術を高めること」「楽譜通りに弾くこと」に終始してしまい、結果往々にして歌唱がおろそかになってしまう。しかし、弾き歌いは何のためにあるのかを改めて考えてもらいたい。弾き歌いは、子どもたちが「表現」活動の一つとしての歌唱を行うために、保育者が子どもたちに寄り添い、助け手となるためのものである。保育者が自分とピアノとの間で世界を完結させ、子どもたちを置き去りにするような弾き歌いは、本来の目的から全く外れたものといえよう。幼児期は歌を耳から覚えていく。保育者の歌声こそが歌唱の導き手である。歌唱は保育者と子どもたちとをつなぐ、コミュニケーションの一つの手段であり、会話の延長のような一面を持っている。保育者が愛情と喜びをもって歌いかけることが子どもたちの表現を育てることになるのである。

4.1.2 ピアノ伴奏の意味

では子どもたちにとって歌唱におけるピアノの演奏にはどういう意味があるのだろうか。ピアノは歌唱の良き助け手であろう。ピアノによってより明確な拍子感が生まれ、集団で歌唱する際には歌唱をまとめ一体化していく役割をも担う。作曲者自身によって作曲されたピアノパートを素晴らしく演奏することができれば、より一層その曲の意図している音楽を作り出せるであろう。芸術性の高い演奏で子どもたちの感性を引き出すことができるかもしれない。しかし、主役はあくまで子どもたちであって、保育者のピアノや歌唱は子どもたちの表現を支え、導くためのものであるべきであろう。弾き歌いにおいてはそのことをはっきりさせておく必要がある。

であるならば、ピアノ演奏は子どもたちの歌唱を邪魔するものであってはならない。勿論演奏スキルを上げるための練習は不可欠である。しかしそれ以上に、子どもたちに目配りをしながら歌うこと、保育者自身が表現豊かに歌うこと、が重要となる。演奏のスキルは一朝一夕に上がるものではない。継続的な練習と共に必要なのは自分のスキルに合った楽譜の選択であろう。

4.1.3 簡易伴奏

実習先から楽譜を渡された場合、自分の演奏スキルをはるかに超えたものであるならば、限られた時間の中で子どもたちのために演奏する事は困難である。それを無理やり演奏しても、崩壊することは目に見えているし、その状態で自身が歌唱することも、まして子どもたちに目を配ることなど不可能であろう。これは

ピアノの練習段階で楽譜通り正確に演奏できるように努力する事を否定するものではない。そのこと自体はピアノの演奏スキルを上げるために大切である。しかし、「子どもたちの歌唱を邪魔するピアノ」であってはならないことを考えれば、楽譜を正確に演奏する事よりも、簡易伴奏であってもしっかりと歌唱でリードすることが出来ればより良い結果となるだろう。その場合は簡易伴奏の楽譜を探すことも選択肢に入れるべきであるが、自分に合った楽譜が見つからないこともある。その場合には自分で伴奏を簡易なものにしなければならぬ。

そこで、「声楽」の授業で取り扱う楽典の中でも、コードをより重視すべきであると考えている。子どもの歌の楽譜にはコードネームを記しているものも多く、コードが分かれば、コード伴奏や、もっと言えばコードの構成音を拾うだけで簡易伴奏が作れるからである。

4.1.4 拍感

その上で重要なのは拍感である。4拍子の場合「1,2,3,4」と規則的に流れる拍感が崩れていると、聞いている方にはさっぱりわからなくなってしまう。間違えて、つかえて弾きなおすのもこれに準じる行為である。本人の中では、難しく指が回らない、音が跳んで弾きにくいなどがあるのかもしれないが、歌っている子どもたちにはそのようなことは全く関係がない。歌唱をリードするためのピアノ演奏に欠かせないのがこの「安定した拍感」である。

学生の中には、歌いだしの「サン、ハイ！」などの声かけができない者がいるが、これも拍感がしっかりしていないために起こる現象である。子どもたちは、前奏でその曲のリズムや速度、雰囲気をつかえる。子どもたちは実は大人よりもずっとリズムに対して敏感であったりするので、保育者は前奏でその全ての情報を子どもたちに与えねばならない。例えば4拍子ならば「1,2,3,4,・・・1,2,3,ハイ！」。子どもたちは「サン」で準備「ハイ」でブレスをして歌い始めるので、前奏と歌に入った時の速度に差があったり、前奏が終わったときに間が空いたり、声かけのタイミングが狂ったりすると歌に入れない。

4.1.5 まとめ

前述のことから、弾き歌いにおいては、子どもたちが主役であることを踏まえ、拍感をもって、保育者自身が表現豊かにしっかりと歌唱しなければならないことが分かる。たとえ伴奏の音が少なくても、間違えても、歌唱が止まらずに子どもたちをリードすることができれば、その場の音楽は流れ続け、音楽を通しての子どもたちとの会話は途切れないのである。

4-2. リズム活動のピアノについて

今回のアンケートで、「リズム遊びで使えるピアノはできた方が良かった」という回答があったので、リズム活動のピアノの指導法について考えてみたい。

①『バーナム ピアノテクニク 導入書』(全音楽譜出版社)⁹⁾を使用し、動作を明確に感じさせる挿絵を参考に、イメージ豊かに、演奏技術(スケール、アルペジオ、和音、オクターブ、装飾音符など)を効率よく学習する。音階やアルペジオ、和音などの要素で構成されている短い曲が多いため、ソルフェージュや初見の練習にも適している。単に指の巧緻性を高める練習に終わらず、同じ音型を繰り返す中でも動きを連想させるような表現の工夫を試みることで、豊かな表現力の獲得を目指すことができる。

一例を挙げてみる。

・グループ1《8番 屈伸（のびちぢみ）》

この曲は、中央ドから1オクターブ下のドを2分音符で奏するのだが、その演奏に合わせて「背伸びして～しゃがむ～」のような声かけも同時に行ってみる。

また、音符の長さや速度を表す用語をただ暗記するのではなく、動きのイメージを伴って理解することで、子どもたちの動きを引き出すピアノに生かすことができる。

一例を挙げてみる。

・グループ3《7番 ぐるぐるまきのブランコ》

この曲は、前半は4分音符で「ゆっくり」の指示があるが、後半は8分音符で「はやく」の指示がある。ブランコの紐を巻き付ける動作や、巻き付いた紐を解く動作をイメージしながら、ゆっくり、はやく等、速度も演習できる。このようにピアノを演奏すると同時に、音符の長さや速度を、動きを伴ったイメージで演習することは、リズム活動のピアノに役立つ。

⑥『うたのすきなねこ ララとルル』（絵・構成 松田奈那子）⁶⁾ を使用し、物語の主人公であるネコの兄弟を子どもに見立てて、子どもたちが散歩に出かけたり、リズムで踊ったり、かけっこをしたりする様子を、「マーチ」「スキップ」「ラン」などの曲で誘導するようなピアノを演習する。

一例を挙げてみる。

・セリフ「ずんずんすすむよ ララとルル」→曲《小犬のマーチ》（外国曲）

・セリフ「たのしいリズム ララとルルもおどろうよ」→曲《うさぎのダンス》（作曲 中山晋平）

・セリフ「なみがあしあとけしてくよ」→曲《はしれはしれ》（作曲 浜口庫之助）

このように、「絵」を見てイメージを広げ、セリフを言いながら行う演習は、具体的で理解を深めやすく、実際に子どもたちを前に弾く準備として、実践的学習に繋げやすい。また、読み聞かせと歌の融合から、オペレッタなどにも発展させることが可能である。

5. おわりに

幼児期に接する「歌」や「リズム活動」を通じて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」のひとつ「豊かな感性と表現」が育ってほしい—それが幼稚園教育の目指すところであり、保育者の願いである。それを実現するには、子どもたちと対峙する保育者自身が豊かな感性と表現力を養い、実践的な音楽力を身につけることが肝要である。そのためには、保育者養成にたずさわる教員も、専門性を活かしながら常に保育の目指すところに留意し、指導内容の工夫や教材研究を続ける必要がある。

保育士資格と幼稚園教諭免許のダブル取得を目指す学生のカリキュラムは過密状態であり、特に2年次はピアノの練習時間を捻出するのも困難なのが現状である。平成31年の教職免許法改正に伴い、本学の幼稚園教諭養成課程においても、領域に関する専門的事項として「子どもと音楽」が新設される一方、従来の「器楽」と「声楽」は2023年度より幼免必修科目から大学独自の選択科目へと変更されることになった。保育者養成においてピアノや歌唱の技術習得は欠かせないことから、今後も学科の推奨科目として位置付ける方針であるが、より効率的で密度の高い音楽実技指導ができるよう、今後も検討を重ねていきたい。

注

- 1) 詳細は芦屋大学論叢第 68 号(2017) p.87-97 (石田愛子「実践的な音楽力を養うために - 「保育内容VI (表現 - 音楽リズム)」での試み-」) 参照。
- 2) 鎌田千佳「幼児教育の現場で求められるピアノの役割について-幼稚園実習後の学生アンケート調査の分析報告-」千葉敬愛短期大学 研究紀要第 40 号, 2018 年。
- 3) 和田垣究・生地加代・藤谷智子・澤田和夫「幼稚園教諭・保育士に求められるピアノ技能について-園長への調査結果に基づいて-」武庫川女子大学 学校教育センター年報第 3 号, 2018 年。
- 4) 児童教育学科 1 年次開講, 選択科目。
- 5) エドナ・メイ・バーナム著, 大島正泰監修, 中村菊子解説・訳『バーナム ピアノテクニック 導入書』全音楽譜出版社, 1975 年。
- 6) 松田奈那子 絵・構成『うたのすきなねこ ララとルル』風濤社, 2015 年。

参考文献・資料

- ・文部科学省, 幼稚園教育要領。
- ・赤井裕美「ピアノを中心とした『保育音楽力』の在り方と養成校の音楽授業に関する考察」湘北紀要第 37 号, 2016 年。
- ・澤田まゆみ「保育士・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か」新島学園短期大学紀要第 33 号, 2013 年。
- ・四家昌博・菊地真知子・岩淵摂子「本学の保育者養成課程におけるピアノ指導の課題と展望-カリキュラムの見直しと学生のアンケート結果から-」
- ・新海節「保育者養成校におけるピアノ教育」藤女子大学紀要第 49 号, 2012 年。
- ・石田愛子「幼稚園教員養成課程におけるピアノ指導のあり方-幼稚園教育実習の実態と課題-」芦屋大学論叢第 45 号, 2007 年。
- ・梅沢一彦編著『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏~実習生・保育者・教員おたすけ楽譜集~』kmp, 2020 年。
- ・梅沢一彦編著『続・誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏~実習生・保育者・教員おたすけ楽譜集~』kmp, 2020 年。
- ・今泉明美・有村さやか『幼稚園教諭・保育士養成課程 子どものための音楽表現技術-感性と実践力豊かな保育者へ-』萌文書林, 2017 年。
- ・石井玲子編著『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』保育出版社, 2009 年。
- ・深見友紀子・小林田鶴子・坂本暁美『保育士, 幼稚園・小学校教諭を目指す人のために この一冊でわかるピアノ実技と楽典』音楽之友社, 2007 年。